

## The Trend of Courses for the Tokai Middle School Graduates

Naoya KARASUDA

Key Words : Tokai Middle School, After Graduation, Higher Education

### Abstract

Various factors are involved in expansion of private secondary education in modern Japan. Therefore, in order to analyze the factors of private secondary education expansion, I think that there is the necessity for case studies.

The purpose of this paper is to investigate what kind of school pupils went to after graduating middle school. As an example, the membership list of alumni association at Tokai middle school was used as a basis for analysis. The forerunner of Tokai Middle School was a Buddhist school.

First, in order to grasp a nationwide trend, the Annual report of the Ministry of Education and data according to middle school were used. Next, it was investigated using the membership list as to what kind of school the graduate went. Finally, it was made clear from the bulletin of alumni association about the situation of "TOCHU-KAI" (Tokai Middle School Association).

- 学園駒場へ」(同一九ノ九、昭和四年九月、一二頁)、「帝大農学部(駒場実科より)」(同一三ノ一一、昭和八年一月、六頁)。
- (37) 「岐葉東中会」(『会報』三二号ノ二・三、昭和十五年二・三月、一八頁)、「金沢葉専東中会」(同一三号ノ一一、昭和八年一月、五頁)、「新人生歓迎三田東中会」(同一三号ノ八・九、昭和七年九月、一〇頁)、「三重高農東中会」(同一四号ノ一〇、大正三年一〇月、一二頁)、「正大東中会」(同一五号ノ五、昭和一〇年五月、五頁)、「中央大学東中会だより」(同一六号ノ一一、大正一五年一月、七頁)、「同志社高商東中会」(同一九号ノ二、昭和一四年二月、四頁)、「日本医大東中会」(同一二号ノ一二、昭和七年、一二月、七頁)、「浜高工より」(同一〇号ノ一、昭和五年一月、九頁)、「仏専大東会」(同一二号ノ五、昭和六年五月、八頁)、「法政大学東中会」(同一三号ノ六、大正二年六月、四頁)、「名医大東中会」(同一七号ノ一〇、昭和二年一月、一一頁)、「名葉東中会記」(同一六号ノ七、昭和二年七月、八頁)、「明治大学東中会」(同一四号ノ一〇、大正三年一〇月、一三頁)など。
- (38) 「通信東中会の記」(『会報』二二ノ七、昭和六年七月、六頁)。
- (39) 「名鉄東中会」(『会報』二三ノ六、昭和八年六月、一〇頁)。
- (40) 昭和二年ごろより、「同窓欄」に「出征だより」(例えば昭和二年一月、二月、『会報』二七ノ一一・一二、八頁など)や、「陣中だより」(同じく昭和一四年二月、『会報』二九ノ二、四頁など)が目立ち始める。また、「護国の英霊」(例えば昭和一四年一月、『会報』二九ノ一〇・一一、六七頁)として、「戦死をせられし由」が掲載されている。
- (41) 『会報』の四月号には、毎年、新入生の書いた「入学の喜び」が掲載されている。これをみると、「僕は明倫中学へは入らうと思つて学校で一日中予習で目を廻す位になつて勉強したかひなくして、遂に落伍しました」
- 『会報』一六ノ四、大正一五年四月、七頁)とか、「僕の第一志望は五中であつた。」(同一七ノ四、昭和二年四月、八頁)、「あ、一中はためだつた。よし東海こそは頑張るぞ」(同一三ノ四、昭和一五年四月、七頁)などの記述がみられる。
- (42) 東海学園編、『東海学園創立百年史』、東海学園、昭和六三年、八九頁。
- (43) 『日本の近代 第二巻 学歴貴族の栄光と挫折』、一〇〇頁。高等学校への進学については、竹内洋が以下のように述べている。
- 実業学校や師範学校には欲望の学校化への歯止めがあつた。中堅技術者や教師という職業に欲望が水路づけられるからである。しかし、中学校にはそうした歯止めがない。歯止めがないどころか、欲望の学校化を煽りたてさえる。中学校のカリキュラムは国語・漢文・外国語、歴史・地理、数学、物理・化学、博物学などである。職業科目はほとんどない。中学校を卒業してもたいした資格は得られない。だから具体的な職業に水路づけられるよりも抽象的な欲望、つまり上級学校への進学願望を植えつけられやすい。そして上級学校のなかでもっとも威信のある学校に願望が照準される。中学校は抽象的な気位肥大化装置だつた。
- (44) 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』、講談社、平成一一年、五〇～七四頁参照。
- 【謝辞】本研究を進めるにあたり、近藤信彦氏はじめ東海中学校・高等学校図書館諸氏に特段のご配慮を頂いた。ここに謝意を表す。
- (東海学園大学教育学部教育学科)

転した（『復刻版愛知県教育史』第三巻、第一法規、昭和五七年、八二〇～八二二頁参照）。

(26) 昭和十一年以降においても大学名の記載がある。例えば、昭和十三年三月卒業で「八高理卒、東京帝大」、昭和十五年三月卒業で「名大」などの記載がみられるが、なぜかは不明である。

(27) 大学名の記載がないものは五例が確認でき、以下のように処理した。

「宗大予修、東洋大卒」（大正七年三月卒業）

「宗教大学予科（私立）」「大学予科」↓東洋大学（私立）」「専門学校・実業専門学校」

「高岡高商卒、名高商商工経営科」

「高岡高等商業学校（官立）」「専門学校・実業専門学校」↓名古屋高等商業学校（官立）」「専門学校・実業専門学校」

「一師二部、名高商」

「愛知県第一師範学校（府県立）」「師範・高等師範」↓名古屋高等商業学校（官立）」「専門学校・実業専門学校」

「国学院高師、同志社高商」

「国学院大学高等師範部（私立）」「専門学校・実業専門学校」↓同志社高等商業学校（私立）」「専門学校・実業専門学校」

「神戸高等商卒、砲術学校卒」

「神戸高等商船学校（官立）」「専門学校・実業専門学校」↓砲術学校

（その他・不明）「各種学校および不明」

一方、すべて大学であると思われるものについて「東帝大卒、大正大学、拓殖大学」、「宗大、大正大卒」の二例を確認した。これらは、進学先としては大学のみと考え、前者を「官立」「帝大」に、後者を「私立」「大学」に分類した。

(28) 「名高工より」（東海中学校々友会編、『会報』第一三三ノ一〇、大正二年一〇月、一〇頁）。以下、同誌の引用、参照は「名高工より」（『会報』一三ノ一〇、大正二年一〇月、一〇頁）。のように表記する。

(29) 「名高工東中会」（『会報』一六ノ五、大正一五年五月、六頁）、同（一九ノ五、昭和四年五月、九頁）、「名高工東中会記」（同二二ノ一、昭和七年一月、八頁）、「名高工東中会送別会」（同二三ノ二・三、昭和八年三月、八頁）、「名高工東中会送別会記」（同二六ノ二、昭和十二年二月、三頁）など。

(30) 「名高工東中会々則」（『会報』二三ノ二・三、昭和八年三月、八頁）。

(31) 「名高商東中会」（『会報』二三ノ四、昭和八年四月、一一頁）。

(32) 「早稲田大学東中会建設について」（『会報』二二ノ六、大正一一年六月、五頁）。なお、ここにもみられる「東京あづま会」について詳細は不明である。ただ、「あづま会便り」（『会報』第十三号ノ六、大正一二年八月、四頁）には、「伊藤校長」が出席し、「母校の現状に就て詳しくお話し」があったとの記述が見られる。また、「委員並に理事の改選、開催時及び度数の改定、事務所の変更の三議を諮り、先生よりも色々とお意見を下された様子がわかる。さらに、「各校委員左の如く決定」とある。特定の進学先で集まるものではなく、また、より組織的な会合であるとみられる。

(33) 「早稲田東中会」（『会報』二四ノ一、昭和九年一月、五頁）。

(34) 「八高から」（『会報』一五ノ三、大正一四年三月、九頁）、「八高たより」（同二三ノ二、大正一二年二月、一一頁）、「八高より」（同二一ノ三、大正一〇年六月、六頁）、同（同二三ノ二・三、昭和八年三月、八頁）、「八高東中会から」（同二五ノ五、大正一四年五月、九頁）など。

(35) 「東京帝大に創設された東中会だより」（『会報』一九ノ五、昭和四年五月、八頁）。

(36) 「誠明学舎から」（『会報』一五ノ五、大正一四年五月、九頁）、「自由の

(19) 以下、「各種学校および不明」に分類したものの一例を示す。「学歴、職業、勤務先等」欄に記載があるものの、「学校別一覽」や『学校名変遷総覽』に記載がなく、判断つきかねるものである。農商務省や通信省など、各省所管の学校は、ここでは設置者を「その他・不明」、学校種を「各種学校および不明」に分類した。なお、通信官吏練習所については、三上敦史「通信講習所・通信官吏練習所に関する歴史的研究―文部省所管学校との関係に注目して―」（教育史学会機関誌編集委員会編、『日本の教育史学』第五〇集、教育史学会、平成一九年、七一―八三頁）参照。

第五〇集、教育史学会、平成一九年、七一―八三頁）参照。

「名葉」「名葉卒」等

昭和一〇年以前については「各種学校および不明」。昭和一一（一九三六）年三月以降の卒業者で、「名葉」などの記述があるものについては、「名古屋薬学専門学校」（私立、専門学校）とした。それまでは、専門学校に類する各種学校として考えた（『愛知県教育史』、第四卷、二〇七―二〇八頁参照）。

「水産講習所」「水産講習所卒」「通信官練」「通信省講習所」等  
水産講習所は農商務省所管（『日本近代教育史事典』、四五―四頁参照）、通信官吏練習所は通信省所管の学校である。

「中京法律」

私立中京法律学校をさすものと考え、専門学校に類する学校とした（『愛知県教育史』、第四卷、二〇八頁参照）。

「京陶試卒」

京都市陶磁器試験場とした。『官報』第五九四五号、明治三六年四月三〇日、六二七頁には、「明治三十六年度ヨリ京都府京都市陶磁器試験場設立ノ件ヲ一昨二十八日農商務省ニ於テ認可セリ（農商務省）」との記載がある。

「神皇学卒」「皇学館卒」「神宮皇学館」等

昭和一五（一九四〇）年三月卒業生以前については「各種学校および不明」。明治三六（一九〇三）年、内務省所管の「専門学校程度官立学校」となり、昭和一五（一九四〇）年には神宮皇学館大学へ昇格した（『日本近代教育史事典』、四三三頁参照）。

(20) 日本近代教育史事典編集委員会編、『日本近代教育史事典』、平凡社、昭和四六年、一三五頁参照。

(21) 三好信浩『産業教育地域実態史の研究』、風間書房、平成二四年、三頁参照。

(22) 教育史編纂会編、『明治以降教育制度発達史』、第四卷、教育資料調査会、昭和一三年（芳文閣、昭和三九年復刻発行）、三四九頁。

(23) 複数の記載がある場合も含む。複数記載のうち、五名については、大学の記載がなかった。例えば、「高岡高商卒、名高商商工経営科」との記載がある場合、高岡高等商業学校一名、名古屋高等商業学校一名と考えた。名古屋高等商業学校一〇五名の内にこれも含んでいる。

(24) 昭和一一（一九三六）年一二月、専門学校令に基づく名古屋薬学専門学校が設立を認可された（愛知県教育委員会編、『復刻版愛知県教育史』第四卷、第一法規、昭和五七年、五五―三頁参照）。それまで、薬学関係の専門学校が愛知県内にはなかったが、「名葉」や「愛葉」などの記載を確認することができる。これらについては昭和十年以前については専門学校として認可されていなかったと考え、その他の学校とした。なお、岐阜県に薬学専門学校があり、ここへの進学が多かったことが分かる。

(25) なお、第八高等学校は、明治四一（一九〇八）年設置当初、県立第一中学校の旧校舍（名古屋市東区外堀町）を借用しており、その後、すでに建設が始まっていた用地（愛知郡呼続町大字瑞穂、後に名古屋市南区）へ移

公立中学校本科ニ係ル前年度卒業者ニ就キ本年度末ニ於ケル状況ヲ挙クレハ高等学校生徒八百二十人、専門学校及実業学校等ノ生徒三千二百四十一人、官庁職員二百三十五人、其ノ他ノ業務ニ従事スル者千七百四十人、就職等未定又ハ不祥ノ者四千十四人、死亡シタル者五十六人ナリ

明治四三年度以降については、官公私立中学校の卒業者を示していると考えられる。『日本帝国文部省第三十八年報』(自明治四十三年至明治四十四年)』(上巻、一六〇〜一六一頁)に以下の通りの記述がある。

公立私立中学校本科ニ係ル前年度卒業者ニ就キ本年度末ニ於ケル状況ヲ挙クレハ実業従事者千九百六十二人、学校職員千八百三十五人、官吏等三百三十五人、高等学校生徒千九百九十八、専門学校生徒二千九百二人、実業専門学校生徒千二百二十五、陸軍士官候補生三百二十四人、陸軍主計候補生三十五人、海軍諸学校生徒百四十二人、其ノ他ノ学校生徒六百三十四人、一年志願兵百九十九人、兵役七十九人、其ノ他五千六百四十一、死亡者八十九人ナリ

(10) 竹内洋『日本の近代 第二巻 学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社、平成一一年、三三〇〜三三二頁参照。

(11) 拙稿「山口高等商業学校の財源と使途」(東海学園大学編、『東海学園大学研究紀要 人文科学研究編』第一六号、平成二三年、二五〜五四頁)参照。

(12) 吉田久一『吉田久一著作集四 日本近代仏教史研究』、川島書店、平成四年、一六三頁参照。「真宗王国」とされる愛知県においては大谷派寺院の占める比率が高かった。詳細は、拙稿「僧侶養成学校から中学校への転換―愛知県を事例に―」、註(8)。

(13) 文部省普通学務局編、『全国中学校ニ関スル諸調査』、明治三七〜昭和一

七年(佐々木亨監修、大空社、昭和六三年復刻発行)。

(14) 名古屋中学校の一九二〇年、「三四・八%」という値は、計二三名のうち「高等学校大学予科入学者」が八名から算出した数値である。

(15) 東海中学校同窓会編『昭和十五年十一月現在 会員名簿』、昭和一五年、東海中学校同窓会。なお、この名簿の裏表紙には「『東海』第三十号ノ十一附録」と記されている。

(16) 本会員名簿の「附言」には、以下の通り記されている。

一、本名簿は昭和十五年十一月一日調なるも努めて其後の判明、届出は訂正せり

一、本名簿上と実際と相違せるもの発見せらるゝときは速に通知せられたし

一、上級学校入学、卒業転学等不明の点多し、此際御一報を煩はしたし

一、不記の部御承知の方は相互扶助の為是非共御通知を乞ふ

一、出生者は所属部隊名をその筋の達しにより記載するを得ず、皆出征中とせり

一、姓名の上の★印は会費完納、○印は幹事、◎印は常任幹事たることを示す

一、会費未納の方は完納又は分納何れにてもよろしく御納付を乞ふ

(17) 明治四三〜昭和九年までの「文部省直轄学校一覽」、「公私立大学別一覽」、「公私立専門学校一覽」等(文部大臣官房文書課編、『日本帝国文部省第三十八年報』下巻)、『日本帝国文部省第六十二年報』下巻、明治四五〜昭和一三年(宣文堂、昭和四五〜四九年復刻発行)から判断した。

(18) 日外アソシエーツ編、『学校名変遷総覧 大学・高校編』、日外アソシエーツ、平成一八年。

「同窓欄」である。「名高商東中会」などの記載は東海中学校より、毎年一定数の入学者があったことをうかがわせるものである。

「不良学生収容の名を走らした」<sup>(42)</sup>との表現にも見られるように、僧侶養成学校から中学校への転換を果たした学校では生徒の素行に悩まされた。県立中学校との比較において、「上級学校のなかでももっとも威信のある」<sup>(43)</sup>高等学校への進学は、確かに劣勢であった。しかし、愛知県においては、私立中学校の存在こそが中等教育の普及・拡大を推し進め、また、その後も存続して、しだいに進学機能を強めていった。旧制中学校から、戦後、新制高等学校となった後、公立高等学校に劣らない進学実績を誇る学校も多くみられる。こうした私立中学校の社会的機能が近代を通して培われたと言えよう。

残した課題について述べておく。都市部において、新中間層の台頭と高等教育機関への進学率の上昇がみられたことはこれまでの研究が指摘するところである。<sup>(44)</sup>また、学費の支払いが可能な階層の存在も私立学校増加の一因となる。これに加え、産業立県としての愛知、とりわけ名古屋市という地域的な特性も見逃してはならない。高等学校、大学への進学を経て官界へ、という進路よりも、地元の専門学校・実業専門学校へ進学し地元の実業界で活躍するという傾向が、他の地域に比べて強かったのではないかと、この点も予想される。むしろ、後者の「選択」が盤石な地域産業を形成した、という見方もできる。今後、進学先とあわせて就職先および勤務地等を一体的に分析する必要がある。

## 注

- (1) 拙稿「僧侶養成学校から中学校への転換―愛知県を事例に―」、教育史学会第五六回大会レジュメ、平成二四年九月二二日、於お茶の水女子大学。
- (2) 齊藤俊彦「明治後期における中学校卒業生の進路―「学歴主義」の隘路―」(学習院大学文学部編、『学習院大学文学部研究年報』、第三六輯、学習院大学文学部、平成二年、二五三―三二二頁)。
- (3) 齊藤俊彦「明治後期における中学校卒業生の進路―「学歴主義」の隘路―」、二五七頁。
- (4) 天野郁夫『学歴の社会史―教育と日本の近代―』、新潮選書、平成四年、一六二―一六三頁参照。
- (5) 広田照幸・鈴木智道・高瀬雅弘「旧制中学校卒業生の進路規定要因に関する研究―山形県鶴岡中学校を事例として―」(東京大学大学院教育学研究科編、『東京大学大学院教育学研究科紀要』、第三九巻、東京大学大学院教育学研究科、平成二二年、九七―一二四頁)。
- (6) 東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』(『東海』第三〇号ノ一附録、東海中・高等学校図書館蔵)。
- (7) 齊藤俊彦「明治後期における中学校卒業生の進路―「学歴主義」の隘路―」、二八四頁参照。
- (8) 『学歴の社会史―教育と日本の近代―』、一二八―一三〇頁参照。
- (9) 『文部省年報』記載の卒業後進路については、明治四二年度以前は「官公立中学校卒業生卒業後ノ状況」あるいは「卒業生卒業後ノ状況(官公立)」という記載がある。『日本帝国文部省第三十七年報(自明治四十二年至明治四十三年)』(上巻、一六一頁)の以下の記述、下巻の統計から、明治四二年度以前については官公立中学校の卒業生進路についてのみの数字であると判断した。

中会に比べて少なく、また、「誠明学舎から」「自由の学園駒場へ」、「帝大農学部（駒場）実科より」などの近況報告が多い。<sup>(36)</sup>「酒が廻り」、「盃は乱れ飛」ぶような「宴」の報告は、これらの記事にはみられなかった。

このほか、岐阜薬学専門学校、金沢医科大学薬学専門部、慶応義塾大学、三重高等農林学校、大正大学、中央大学、同志社高等商業学校、日本医科大学、浜松高等工業学校、仏教専門学校、法政大学、名古屋医科大学、名古屋薬学専門学校、明治大学などに「東中会」が設けられていたことが確認できた。<sup>(37)</sup>

なお、就職先での「東中会」として、「通信東中会」<sup>(38)</sup>や「名鉄東中会」<sup>(39)</sup>の記事もみられた。「名鉄東中会」では、「実務員であり又距離の関係から全員の出席は不可能」であったようであるが、「六月廿一日午後五時笹島のイカリ食堂で定例の東中会を開いた」との記述がみられる。「在校当時の懐旧談に花をさかせ」た様子が述べられている。

「同窓欄」にこのような記事が掲載されることから、東海中学校から名古屋市内およびその近郊の専門学校へ、あるいは早稲田大学などの私大へと、一定のルートができていたことをうかがうことができる。特に上京した者にとっては、入学先ですでに在学している同窓に温かく迎えられ、帰属意識を強める作用があったのではないだろうか。ただ、『名簿』の分析においても指摘したが、「東中会」の様子をみても、高等学校や帝国大学に比べ、専門学校・実業専門学校や私立大学において隆盛であったとの印象を受ける。

しかしこの後、戦局の激化とともに、「同窓欄」には「出征だより」や「陣中だより」が掲載されはじめる。旧交をあたためる青年達の姿にかわって、若き「護国の英霊」たちの名で紙面が埋められるようになっていった。<sup>(40)</sup>

## おわりに

『文部省年報』、『中学校二関スル諸調査』から、愛知県の進学比率は全国的にみて上位を占めていたことが分かった。学校別にみると、東海中学校の高等学校・大学予科の進学者の比率は県立一中に迫る勢いであった。しかし、戦前の名古屋市およびその近郊においては、県立第一中学校や第五中学校、明倫中学校が存在し、高等学校・大学予科への進学においてはこれらの学校がやはり優位であった。概して、私立中学校卒業後の進学先をみると、高等学校・大学予科にくらべ専門学校・実業専門学校への進学者の比率の方が高かった。高等学校・大学予科への進学者数は、中学校の序列化を招いたと考えられる。『会報』中の入学に際しての生徒の所感からも、県立第一中学校、第五中学校、明倫中学校を不合格になった生徒が入学していたことがうかがえるが、別稿で明らかにしたい。<sup>(41)</sup>

『名簿』から東海中学校卒業後の進学先について分析した。最も多くを占めた専門学校・実業専門学校の具体的な学校名をみると、名古屋高等工業学校、名古屋高等商業学校への進学が圧倒的に多数を占めていたことが分かった。これを裏付けるものが『会報』にみられる

から次へと花が咲き時の過ぎ行くの知らなかつた。

特に食事中の漫談的自己紹介は痛快極りなく、爆笑の嵐であつた。斯くして歓を尽し、和氣藹藹裡に東中校歌及び「都の西北」早

大校歌を合唱し会を閉づ。

高等学校の進学先で最も多かつた第八高等学校においても「東中会」が設けられていたようであるが、「八高より」、「八高たより」、「八高から」などの近況報告が多い。<sup>(34)</sup>大正一四（一九二五）年三月、八高東中会代理を務める生徒による「八高から」という以下の記述から、「八高東中会」が一五名であつたことが分かる。

昨今はまた寒さを増しました。其後は意外に御無沙汰致して居ましたが先生には御近状如何ですか。

私等皆元氣です。来週の木曜からは試験が始まりますので忙しくなりました。

卒業生を出したり、入学生を迎へたり、先生方は嘸忙しい事と拝察致します。少なかつた八高東中会からも、今年卒業する人が五人ありますので紀年の撮影をしましたので一枚お贈り致します、皆昔ながらの顔をして居ります。

バックは剣の森といつて校庭の北隅にあります社の中に御真影が収めてあります。

会報をいつも有難く頂戴して居ます。四五年の人に何か刺戟になる様な事を書かうかと思ひましたが時機がおくれたので次の様なまづい手紙となりました。

八高東中会も十五人になります、沢山入つて来る様にと祈つて居る次第です。終りに益々校運の隆盛に向ふ様に祈ります。敬具

二月二十六日

(後略)

先にも述べたとおり、帝大のうち、『名簿』上に見られる進学先として最も多くを占めたのは東京帝国大学であつた。東京帝国大学にも「東中会」が創設された<sup>(35)</sup>とある。

先学期末から先輩から懇懇されてゐました。東京帝大<sup>マ</sup>東中会を新しく入会された方々の歓迎会を兼ねて、本郷中島<sup>マ</sup>ベーカーリーで開きました。

最初下里兄の後援を得まして相当自信を持つて運動に取りかかりましたが、不幸途中で病床につかれ小生自身も腸を害しまして、一時は如何なる事かと心配してゐましたが、幸に会員諸君の御後援により、当日は先日グロスター公殿下御来学のとを受け、各学部開放の事があり、にぎやかな大学のそよめきをよそに会員過半数を得て、思ひ／＼の漫談に花を咲かせました。東海を出てより失敬してゐた人もありました。八高以来顔をあわせる機会のかつた方もありました。久し振にあつて思はぬ発展振りに驚かさされた人もありました。

斯く集り旧情を温め、お互に理解しあふ事は無意義ではないと思ひました。今後時々聞きたいと思つてゐます。

しかし、第八高等学校と同様、東京帝大東中会の記述自体が早大東



専門学校における「東中会」の一部に過ぎないが、『会報』には頻繁に「東中会」の報告が掲載されている。また、ここにみられる文面からしても盛況であった様子をうかがうことができる。

大学での「東中会」についてみてみよう。『名簿』上、大学の進学先として最多であった、早稲田大学について検討する。大正一一（一九二二年六月の『会報』）には、「早稲田大学東中会建設について」として、以下のように記されている。<sup>32)</sup>

（前略）

私等はいつも我懐かしき母校より便りのある毎に日一日と隆盛に赴いて行く様を見て感慨無量です。何となく肩味（かた）が広い様な気がしてなりません。これは総ての同窓が共に口にしてゐる所です。其の故に我等はそれを見るにつけても自分等のいかに責の重きかを思はせられます。其の意味よりして我が社会に出て相互ひに援助し合ふ為に又在校中親密を計り便宜を与ふる為に且上京される諸兄に幾分なりとも力添への出来る為に今回新たに我早稲田大学内に於て早大東中会なるものを建設しました。これは同窓の方々が多くなつてきた事からして思ひ立ちたるものです。勿論東京あづま会から全然独立したのでなく、相互に連絡を取る考です。

（中略）

そして其の第一回の会合として去る六月四日単に無意味なる集合をやめて鎌倉江の島方面に出掛けました是れはあまりにその発表の日と会合の日が接迫してゐた為御存知のない方もあられた様で

したがそれには何とも仕方のない事情のあつた為でした。只今の如早大在校諸君は三十余名であります。

（後略）

大正一一年時点で、「早大在校諸君」が「三十余名」であることが記されている。その後も年に一、二回の頻度で「早大東中会」の報告が記載された。例えば、大正一二年五月には、以下の記述がみられる。今年四月数名の秀才を我が早大に迎ふるに際し此等諸君の歓迎を兼ねて第三回東中会を十二日午後五時より早稲田鶴巻町角屋にて開催した。定刻前より続々と集合、アツパレ末頼母敷天下の豪傑ばかり、定刻になり下田幹事の挨拶があり本年度の幹事委員の選挙を行ひ、それより自己紹介にうつる。各自のメートルは段々に昇り初め到底市場のメートル測量器にては計り得ない迄に昇りつめた。斯くて珍歌珍芸の交換ありて興のつくるを知らず十時漸くにして下田君の音頭にて早大並に東中の万歳を三唱して名残り惜しき散会をつげた。

この年四月「早大」に入学した者の歓迎を行ったのであろう。「末頼母敷天下の豪傑」たちが酒を酌み交わし意気をあげた様子が分かる。また、昭和八年一二月九日には、「僅かに八名の参集」に過ぎないが、「オール早稲田東中会」が開催された。<sup>33)</sup>

見知らぬ校友も顔見合はせれば十年の知己のその様に親しくなり、お互に肺肝を吐露し懐旧の情懐しき東中時代の想出話は勿論、各自研究の交換、趣味の談合、諸先生方の安否等々に話は次

先において、東海中学校卒業生同士が集まる「東中会」などと称する会が開かれ、その開催を呼びかける記事が東海中学校校友会『会報』の「同窓欄」に掲載されている。

『名簿』中、進学先として最多であった名古屋高等工業学校についてみてみよう。以下の記事から、大正二二（一九二三）年に「名高工東中会」が発足したと思われる。<sup>(28)</sup>

母校東海中学校出身にして吾名古屋高等工業学校在校生は近年頓に増加致しましたので此等の同窓生間の親睦をはかる可く名高工東中会設立の企ては早くから各人の脳裡に存在して居たのでありましたが当然の結果として実は本年二月十日発会式及び本年度卒業生三名の送別会を兼ねて第一回東中会なるものを花月園で開催しました。次で四月二十二日（日曜）本年度入学新入会員歓迎の意味で第二回東中会を犬山方面に行ひましたが当日は天候の関係上出席者が割合少なかつた為、二学期の初に又一同が集まつて見たいと思つて居りました。処がはからずも京浜地方未曾有の震災の為時節柄これを大々的に行ふ事に忍びず只母校を中心として一同が暖い集りをするといふ目的で九月十七日授業後校内酒保で約一時間程十数名の会員は楽しく語合ひました。

（中略）

而して今や東中会は他の中学同窓会と肩をならべて基礎確固とし一同は来年の新入会員の入会を待つて居ります。現在会員二十一名。此れを一中明倫名古屋各中学出身在校生に比するとき其数

に於て未だ格段の差なきにしもあらずです。幸にして名商工御志望の方は繁種奮発多数の御入学あらん事を一同は鶴首して居ります。〔二十五日製図室にて〕

この後も、卒業時期や入学時期に、定期的に東中会を開催していた。<sup>(29)</sup> 上記の記事からすると、会員は「二十一名」と少ないが、昭和八年三月の『会報』には、「名高工東中会々則」<sup>(30)</sup>が掲載されており、会員数の増加をうかがわせる。

また、以下の記述は、「名高商東中会」主催による新入生歓迎会の報告であると思われる。昭和八年春、名古屋高等商業学校への新入生を迎える会が催された。<sup>(31)</sup>

傘に散る花嬉しさよ春の雨

朝より降りしきる雨しとくと、世に云ふ春雨とか申す雨の中を、吾々は新入生諸君の前途を祝すため歓迎会の宴を「鳥勝」で開いた。三々五々相集りて定刻七時には部屋一杯。

開会の辞につれて、そろ／＼酒が廻り、各自思ひ／＼の経験談、新入生諸君の苦心談、その間に盃は乱れ飛び一座を陽気にし、或は緊張せしめ食べる物はスキ焼なれど語る言葉は千金に値し、意気ある一夜を過した。

最後に東中校歌合唱、万歳三唱、服部君の閉会の辞で解散した。帰る頃花に曇つた夜の空もいつしか晴れて、祝すが如く星さへまたたいてゐた。

昭和八年四月十五日（大藪記）

3. 『会報』にみられる進学先

東海中学校校友会の『会報』からみると、上級学校への進学者数は増加し続け、最も高いときで七割をこえていたことがわかる（【表10】参照）。時代とともに、一つの進学先で、東海中学校卒業者が一定数を占めるようになった。先の分析によっても分かるように、専門

【表9】「住職」「僧侶」となった者の進学先

卒業年度	進学先	住職・僧侶	卒業年度	進学先	住職・僧侶
1911	私立仏教専門学校	3	1921	私立仏教専門学校	1
	宗教大学	1		宗教大学	2
	早稲田大学	2		東京帝国大学	1
	学校名記載なし	3		彦根高等商業学校	1
1912	宗教大学	1	1922	学校名記載なし	1
	学校名記載なし	5		宗教大学	4
1913	私立仏教専門学校	2	1923	大正大学	1
	早稲田大学	1		岐阜高等農林学校	1
	学校名記載なし	1		私立仏教専門学校	1
1914	私立仏教専門学校	2	1924	宗教大学	1
	早稲田大学	1		東京帝国大学	1
	学校名記載なし	2		大正大学	3
1915	私立仏教専門学校	2	1925	私立仏教専門学校	2
	宗教大学	4		大正大学	3
	臨済宗大学	1		私立仏教専門学校	1
	学校名記載なし	7		立正大学	1
1916	私立仏教専門学校	2	1926	学校名記載なし	1
	宗教大学	4		大正大学	2
1917	宗教大学	3	1928	大正大学	1
1918	私立仏教専門学校	2	1929	私立仏教専門学校	2
	宗教大学	5		大正大学	1
	学校名記載なし	2		学校名記載なし	1
1919	私立仏教専門学校	2	1930	私立仏教専門学校	1
	学校名記載なし	2		その他・不明	1
1920	私立仏教専門学校	1	1931	私立仏教専門学校	1
	宗教大学	3		西山専門学校	1
	学校名記載なし	1		1932	私立仏教専門学校
				計	106

(東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。)

【表10】東海中学校における入学志願者数・入学者数・上級学校入学者数

和暦	入学志願者	入学者	入学者 ／入学志願者	卒業者	上級学校 入学	上級学校入学者 ／卒業者
1909	42	40	95.2%	0	0	
1910	95	83	87.4%	0	0	
1911	90	76	84.4%	0	0	
1912	89	66	74.2%	42	27	64.3%
1913	92	73	79.3%	33	7	21.2%
1914	138	120	87.0%	29	9	31.0%
1915	167	135	80.8%	36	17	47.2%
1916	211	156	73.9%	35	10	28.6%
1917	439	153	34.9%	35	16	45.7%
1918	357	165	46.2%	34	18	52.9%
1919	415	160	38.6%	55	18	32.7%
1920	650	165	25.4%	63	27	42.9%
1921	863	259	30.0%	93	26	28.0%
1922	893	269	30.1%	114	81	71.1%
1923	1007	267	26.5%	113	81	71.7%
1924	822	255	31.0%	135	99	73.3%
1925	743	207	27.9%	157	83	52.9%
1926	772	269	34.8%	165	106	64.2%
1927	909	262	28.8%	204	86	42.2%
1928	846	261	30.9%	210	129	61.4%
1929	777	270	34.7%	229	125	54.6%
1930	582	244	41.9%	180	132	73.3%
1931	687	271	39.4%	237	130	54.9%

(東海中学校校友会編、『会報』、第21号/10・11、昭和6年11月、11頁より作成。なお、和暦を西暦にあらため、比率を付記した。)

学校・実業専門学校では名古屋高等工業学校や同高等商業学校、私立大学では進学先として早稲田大学が多数を占めていた。これらの進学

【表8】「学歴」欄に複数校の記載があるものの学校名

設置主体	学校種	学校名	帝大、大学										それ以外								
			官立										私立	官立	私立	その他・不明					
			帝大					大学					大学	専門学校・実業専門学校		各種学校および不明					
			東京帝国大学	京都帝国大学	東北帝国大学	九州帝国大学	大阪帝国大学	名古屋帝国大学	名古屋医科大学	東京工業大学	神戸商業大学	広島文理科大学	東京文理科大学	慶応義塾大学	早稲田大学	中央大学	日本大学	名古屋高等商業学校	同志社高等商業学校	東洋大学	砲術学校
官立	高等学校	松江高等学校	1					1													
		水戸高等学校	1																		
		静岡高等学校						1													
		第八高等学校	8	12		1			3	1											
		姫路高等学校		1																	
	専門学校・実業専門学校	岐阜高等農林学校			1																
		京都高等工芸学校							1												
		広島高等工業学校					1														
		浜松高等工業学校					1														
		名古屋高等工業学校	1						3												
		高岡高等商業学校															1				
		名古屋高等商業学校				1				1											
		神戸高等商船学校																			1
	師範・高等師範	大阪外国語学校				1															
		広島高等師範学校									1										
府県立	東京高等師範学校										1										
	浪速高等学校	1																			
市立	高等学校																				
	師範・高等師範																1				
私立	専門学校・実業専門学校	横浜市立 横浜商業専門学校											1								
		九州歯科医学専門学校						1													
	大学予科	国学院大学高等師範部																1			
		宗教大学予科																		1	
		早稲田大学第一高等学院												1							
早稲田大学第二高等学院												3									
日本大学予科														1							
その他・不明	各種学校 および不明	通信官吏練習所														1					
		東京慈恵院																			
計			12	13	1	2	3	1	5	4	2	1	1	1	5	1	1	2	1	1	1

(東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。)

【表7】設置者別、学校種別、卒業年度別の記載数（帝国大学・大学）

卒業年度	官立		府県立 大学	私立 大学	帝大、大学の 欄記載なし	計
	帝大	大学				
1911	2				42	44
1912					34	34
1913	1				29	30
1914					39	39
1915	1				38	39
1916	1				34	35
1917	2				33	35
1918	1			14	42	57
1919	3		1	7	55	66
1920	2	1		15	74	92
1921	4	2	2	25	87	120
1922	9	3	3	27	78	120
1923	5	6	1	18	110	140
1924	6	5		31	122	164
1925	10	4	2	30	130	176
1926	6	5	1	30	174	216
1927	8	6	2	31	176	223
1928	7	3		43	180	233
1929	6	4	1	32	142	185
1930	10	6	2	29	196	243
1931	5	3	1	24	191	224
1932	3	2		24	183	212
1933	11	2		18	185	216
1934	3	2		14	189	208
1935	1			9	191	201
1936		1		11	219	231
1937	1			8	231	240
1938				8	224	232
1939	1	1		4	240	246
計	109	56	16	452	3,668	4,301

(東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。)

学校、大学予科、専門学校・実業専門学校等への進学と、帝国大学、大学への進学との関係を示した。最も多いのは「八高卒、京大卒」など、つまり第八高等学校から京都帝国大学への進学と思われるが、通算して一二名を確認することができた。ついで多いのは、第八高等学校から東京帝国大学への進学であり、八名であった。この他を合計すると、高等学校から帝大・大学への進学を果たしたとみなすことがで

を果たし、その後どのような職業に就いたのかについての詳しい分析は別稿で行いたい。

きるのは三〇名である。  
 なお、複数校の記載があるものの大学の記載がないもの、複数校の大学名がみられるものもあった。<sup>(27)</sup>

(4) 仏教系高等教育機関への進学  
 先ほども述べた通り、愛知県においては、中学校卒業後に「宗教宣布者トナリタル者」「僧侶トナリタル者」の数が突出している。浄土宗の僧侶養成学校を前身とした東海中学校ではいかがであろうか。【表9】は、「学歴、職業、勤務先等」欄に「住職」あるいは「僧侶」等の記載がある生徒を選び、学歴との関係を示したものである（進学先の複数記載は除く）。通算で一〇六名を確認できた。「僧侶」「住職」等の記載がある者のうち、進学先として宗教大学の記載がある者が通算三二名、私立仏教専門学校が二六名、大正大学が一名となっている。仏教系高等教育機関への進学後、寺院住職となると一定のルートがあったと予想されるが、どのような進学

ている。しかし、比率で見ると、大学予科を合わせても二割に達していない（【図3】参照）。圧倒的多数を占めるのは専門学校・実業専門学校への進学であったと考えられる。

② 帝国大学、大学への進学

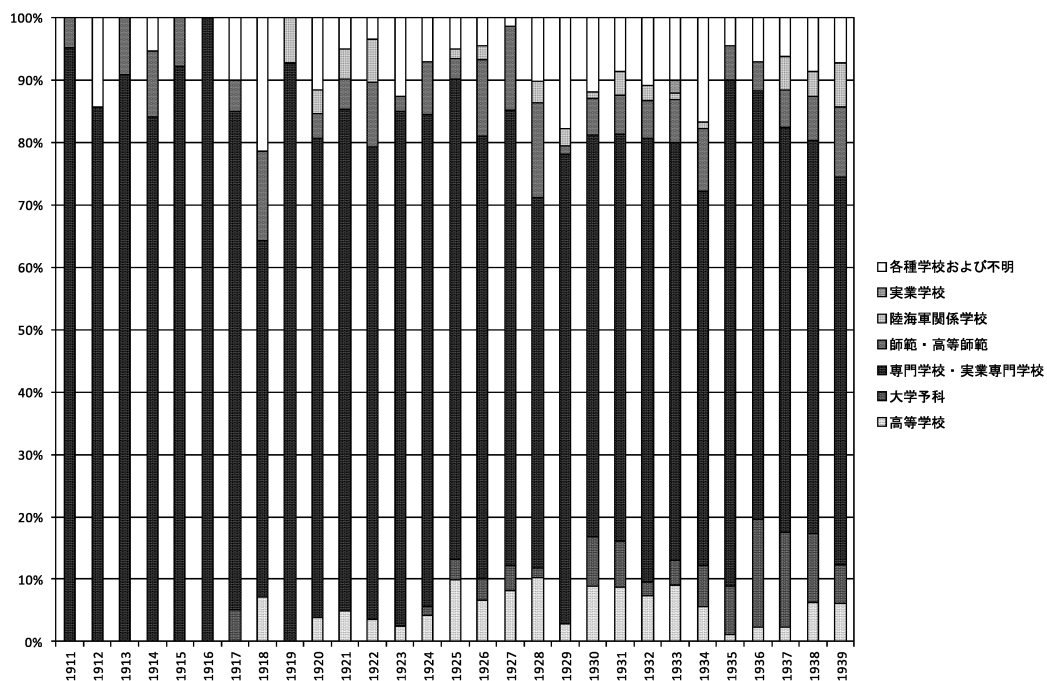
【表5】を見ると、およそ八五%の卒業者に大学名の記載がない。専門学校・実業専門学校の記載が圧倒的多数であったことから、大学まで進学した者は限られていたと考えることができる。【表7】は帝国大学、大学の記載があったものの卒業年度別推移を示したものである。一九二〇年代から一九三〇年代の前半については、帝国大学の記載が、多い時で一名にのぼっていた（一九三三年）<sup>26</sup>。最も多いのは私立大学の記載であり、二九年間の通算で四五二件を確認できた。

ここには示していないが、大学名の記載を見ると、多くは私立大学であった。早稲田大学が通算で最多の一〇七名であり、ついで明治大学七一名、慶応義塾大学四〇名と続く。また、大正大学（三八名）、宗教大学（二一名）も一定数の記載があった。府県立の大学としては、愛知医科大学、京都府立医科大学、大阪医科大学の記載があった。帝国大学は「帝大」と分類したが、最も多かったのは、東京帝国大学であり、大正二（一九一三）年から昭和八（一九三三）年の間で四〇名の記載がみられた。ついで京都帝国大学が一九名であった。

③ 複数記載

以上のうち、複数の学校名が記載してあるものについて検討する。

【表8】は複数記載がある五八名の学校名を示したものである。高等



（東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。）

【図3】東海中学校における高等学校・大学予科・専門学校等進学の構成比

【表6】設置者別、学校種別、卒業年度別の記載数（高等学校・大学予科・専門学校等）

卒業年度	官立				府県立				市立	私立				その他・不明		記載なし	計	
	高等学校	大学予科	専門学校・実業専門学校	師範・高等師範	高等学校	大学予科	専門学校・実業専門学校	師範・高等師範	実業学校	専門学校・実業専門学校	大学予科	専門学校・実業専門学校	実業学校	各種学校および不明	陸海軍関係学校			各種学校および不明
1911			3				3	1				14					23	44
1912			2				2					2		1			27	34
1913			3					1				7					19	30
1914			2	1			1	1				13				1	20	39
1915							1	1				11					26	39
1916			4									10					21	35
1917			8				1	1		1		8				2	15	36
1918	1		5					2				3				3	43	57
1919			6									7		1			52	66
1920	1		17					1				3		1	3		66	92
1921	2		24					2				9		2	2		79	120
1922	1		17	1				2				5		2	1		91	120
1923	1		23					1				10				5	100	140
1924	3		36	2			2	4		2	1	16				5	93	164
1925	5		26	1	1			1			2	21			1	3	115	176
1926	6		36				1	11			3	27			2	4	126	216
1927	6	1	35	1				9			2	19				1	149	223
1928	6		18	1			1	8			1	16		2	2	4	174	233
1929	2		32					1		5		18		5	2	8	112	185
1930	9		31	1				5		5	8	29		8	1	4	142	243
1931	7	2	25	2				3		7	4	22		2	3	5	143	225
1932	6		28					5		10	2	21		7	2	2	129	212
1933	9		38					7	1	3	4	27	1	7	1	3	116	217
1934	4		31		1			9		4	6	19		13	1	2	118	208
1935	1		35					5		2	7	38		3		1	110	202
1936	2	1	40		1	1		6		4	20	44		6		4	103	232
1937	3	2	39			2		8		5	16	41		1	7	7	109	240
1938	8		45					9		3	14	32		2	5	9	105	232
1939	3		39	1	3	1		10		2	5	20		2	7	5	148	246
計	86	6	648	11	6	4	12	114	1	52	96	512	1	59	40	84	2,574	4,306

※複数記載も含む。

(東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。)

【表5】設置者別、学校種別の記載数

高等学校、大学予科、専門学校等				帝国大学、大学			
設置者	学校種	記載数	比率	設置者	学校種	記載数	比率
官立	高等学校	86	2.0%	官立	帝大	109	2.5%
	大学予科	6	0.1%		大学	56	1.3%
	専門学校・実業専門学校	648	15.1%				
	師範・高等師範	11	0.3%				
府県立	高等学校	6	0.1%	府県立	大学	16	0.4%
	大学予科	4	0.1%				
	専門学校・実業専門学校	12	0.3%				
	師範・高等師範	114	2.7%				
	実業学校	1	0.0%				
市立	専門学校・実業専門学校	52	1.2%				
私立	大学予科	96	2.2%	私立	大学	452	10.5%
	専門学校・実業専門学校	512	11.9%				
	実業学校	1	0.0%				
	各種学校および不明	59	1.4%				
その他・不明	陸海軍関係学校	40	0.9%				
	各種学校および不明	84	2.0%				
高等学校、大学予科、専門学校等の記載なし		2,574	59.8%	帝大、大学の記載なし		3,668	85.3%
計		4,306	100.0%	計		4,301	100.0%

※複数記載も含む。

(東海中学校同窓会編、『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を基に作成。)

の進学が一〇五名となっていた。<sup>(23)</sup> ついで多いのは「岡師卒」、「三重師卒」、「一師二部」などの師範学校である。最多は愛知県第一師範学校の九一名であり、次に多いのは岡崎師範学校一一名であった。また、官立について、私立の専門学校・実業専門学校への進学も目立つ。このうち最も多かったのは、早稲田大学専門部への進学が五七名、ついで私立仏教専門学校への進学が四九名であった。日本大学専門部(四四名)、名古屋薬学専門学校(四一名)も大きな割合を占めている。<sup>(24)</sup>

このほか市立の岐阜薬学専門学校も四七名となっている。

官公私立を合わせると専門学校・実業専門学校の記載が一、二二〇名、学歴欄の記載がないものも含める全体の、およそ二八・四％にのぼる。

卒業年度別にみると、いかがであろうか。【表6】は設置者別、学校種別、卒業年度別にみた記載数である。また、【表6】を基に学校種別にみた構成比を【図3】として示した。先ほども述べた通り、最も多いのは専門学校・実業専門学校の記載であった。設置者別にみると、一九一〇年代には私立専門学校・実業専門学校への進学が多いが、一九二〇年代以降、官立が私立を上回る年度が多くなっていったことが分かる。

官立高等学校の記載は、一九一〇年代にはほとんどみられないが、一九二〇年以降、次第に数を伸ばしてきた。最多で一九三〇年の九名であり、内訳をみると、第八高等学校が五名、県外では山口高等学校、静岡高等学校、松江高等学校、水戸高等学校がそれぞれ一名ずつとなっ



## (2) 『名簿』中「学歴、職業、勤務先等」欄について

東海中学校同窓会が作成した『名簿』中の「学歴、職業、勤務先等」欄の記載を基に、卒業後の進学先としてどのような学校があったのかを検討する。<sup>(15)</sup>「同窓会規約」には、会員として以下の者を掲げている。

本会々員は東海中学校の現旧職員及び卒業生並に四年終了後高等専門学校に入学したる者を以て組織し永く本会々員たるものとす  
尚本校に特別の関係ある者又は本校生徒たりし者にして本会が  
適当と認めたる時は会員に推薦することを得

先にも述べたが、この『名簿』も、「附言」に示されている通り不明の点が多く、また、実際と相違する場合もある。<sup>(16)</sup>把握できる情報は限られているが、進学の概況を長期的に把握することは可能である。

期間は明治四五（一九一二）年三月第一回卒業生から、昭和一五（一九四〇）年三月第二九回卒業生まで、四、三〇一名を対象とした。なお、『名簿』末尾には、「第三十回」として「四修」と記載のある三名の氏名が確認できる。この三名については分析対象から除外した。

以下のような分類を試みることにした。まず、「学歴、職業、勤務先等」欄の記載事項より進学先と思われる学校名を判断した。学校名の判断に際しては、『文部省年報』巻末の学校別一覧および『学校名変遷総覧』<sup>(18)</sup>を利用した。これらを用いても判断ができればぬるもの、進学先なのか就職先なのか判断が難しいものについては、「その他・不明」とした。<sup>(19)</sup>次にこの学校名に基づき、設置者を官立、府県立、市立、私立等に分類し、さらに学校種別の分類として、帝大、大学、高等学

校、大学予科等に分類した。単独の記載が大半であるが、複数の記載も五八件みられた。

大正八（一九一九）年四月一日より「大学令」が施行されたので、「大学」と名のつくものであってもそれまでは「専門学校」と分類した。<sup>(20)</sup>また、直轄の高等工業、高等商業、高等農業等は、「専門学校・実業専門学校」に分類した。<sup>(21)</sup>さらに、その他の直轄学校については、専門学校令（明治三六年三月二七日、勅令第六一号）附則第二六条に、「千葉医学専門学校、仙台医学専門学校、岡山医学専門学校、金沢医学専門学校、長崎医学専門学校、東京外国語学校、東京美術学校及東京音楽学校ハ本令施行ノ日ヨリ専門学校トス」とあることから「専門学校・実業専門学校」に分類した。

## (3) 学歴記載事項の集計

以上の分類に基づき集計した結果が【表5】である。複数の学校名が記載されているものも含む延べ数である。以下、①高等学校・大学予科・専門学校等への進学、②帝国大学・大学への進学、③複数記載に分けて考えてみる。

## ①高等学校・大学予科・専門学校等への進学

【表5】より、最も多かったのが、官立の専門学校・実業専門学校への進学であったことがわかる。六四八名を確認することができた。内訳を示すと、名古屋高等学校（愛知郡御器所村）への進学が二六九名で最多であり、ついで名古屋高等商業学校（愛知郡呼続町）へ

【表4】卒業者に占める「官公立専門学校及之と同程度学校入学者」の比率

年代	進学者数						卒業者に占める比率					
	県立		私立				県立		私立			
	第一	明倫	名古屋	尾張	東海	愛知	第一	明倫	名古屋	尾張	東海	愛知
1903	17	5					18.9%	31.3%				
1904	29	2					18.5%	8.7%				
1905	42	22					33.6%	32.4%				
1906	15	34	0				12.4%	39.5%				
1907	17	19	1				14.0%	23.5%	12.5%			
1908	27	9	2	0			22.5%	12.7%	28.6%			
1909	57	10	4	0	0		40.1%	12.3%	57.1%			
1910	35	13	0	0	0		21.2%	15.7%	0.0%			
1911	31	11	8	0	0		20.9%	14.3%	34.8%			
1912	28	10	3	0	15		20.6%	13.9%	8.6%		35.7%	
1913	37	12	8	4	3		27.4%	16.0%	20.0%	16.0%	9.1%	
1914	41	9	14	0	9		27.5%	12.2%	29.8%	0.0%	31.0%	
1915	38	18	12	13	9		23.9%	17.6%	26.7%	26.0%	25.0%	
1916	34	18	8	4	12		20.9%	19.6%	15.1%	8.3%	34.3%	
1917	31	13	8	10	12		24.4%	13.5%	14.3%	22.2%	34.3%	
1918	32	16	14	13	11		20.3%	19.5%	26.9%	17.6%	32.4%	
1919	20	26	17	15	17		14.3%	29.9%	28.8%	26.3%	30.9%	
1920	44	39	8	14	13		29.3%	41.5%	34.8%	21.5%	20.6%	
1921	43	24	25	13	24		31.9%	31.2%	32.1%	19.1%	26.4%	
1923	29	23	23	24	44		27.9%	25.0%	23.0%	23.1%	38.9%	
1924	30	58	21	7	61		27.3%	60.4%	18.4%	7.1%	45.5%	
1925	28	27	29	8	70	3	22.2%	25.0%	23.8%	8.1%	44.6%	4.8%
1926	28	32	31	17	88	6	19.7%	29.4%	17.9%	14.7%	53.7%	7.7%
1927	30	19	26	40	71	3	21.1%	17.4%	13.4%	38.5%	34.8%	3.7%
1928	33	24	33	33	107	9	19.6%	14.2%	18.2%	30.3%	50.7%	8.3%
1929	23	27	18	48	89	6	16.7%	16.2%	9.8%	37.5%	38.9%	6.8%
1930	32	24	27	43	116	12	18.4%	16.1%	15.3%	41.0%	64.4%	12.6%
1931	27	43	42	23	109	17	18.9%	25.9%	37.5%	14.2%	46.0%	18.1%
1932	49	32	14	42	100	6	23.0%	16.3%	7.6%	42.0%	46.7%	6.9%
1933	29	32	35	29	96	2	15.0%	16.2%	20.7%	37.7%	45.7%	2.7%
1934	35	43	21	31	72	8	17.2%	19.7%	20.2%	52.5%	33.6%	15.1%
1935	40	35	22	22	43	9	19.5%	17.2%	23.7%	48.9%	20.8%	15.5%
1936	47	4	17	25	32	11	22.7%	11.4%	44.7%	26.9%	16.1%	14.1%
1937	65	46	25	23	62	7	31.0%	20.8%	35.7%	57.5%	28.1%	10.1%
1938	60	34	30	43	81	19	30.6%	16.3%	42.9%	60.6%	34.8%	24.4%

※1919年以前については、「官公立諸学校ニ入学ノ者」、1920年以降については、「官公立専門学校及之と同程度学校入学者」「私立専門学校及之と同程度学校入学者」の合算を示した。なお、空欄は学校名の記載自体がないことを示す。

(各年度の『中学校ニ関スル諸調査』を基に作成。)

【表3】中学校卒業者に占める「高等学校大学予科入学者」の比率

年代	進学者数						卒業者に占める比率					
	県立		私立				県立		私立			
	第一	明倫	名古屋	尾張	東海	愛知	第一	明倫	名古屋	尾張	東海	愛知
1903	23	0					25.6%	0.0%				
1904	17	0					10.8%	0.0%				
1905	16	0					12.8%	0.0%				
1906	17	0	0				14.0%	0.0%				
1907	17	0	0				14.0%	0.0%	0.0%			
1908	19	3	0	0			15.8%	4.2%	0.0%			
1909	20	9	0	0	0		14.1%	11.1%	0.0%			
1910	28	8	0	0	0		17.0%	9.6%	0.0%			
1911	27	10	0	0	0		18.2%	13.0%	0.0%			
1912	22	9	0	0	0		16.2%	12.5%	0.0%		0.0%	
1913	14	16	1	0	0		10.4%	21.3%	2.5%	0.0%	0.0%	
1914	9	14	1	0	1		6.0%	18.9%	2.1%	0.0%	3.4%	
1915	12	12	2	0	2		7.5%	11.8%	4.4%	0.0%	5.6%	
1916	22	3	2	1	0		13.5%	3.3%	3.8%	2.1%	0.0%	
1917	12	5	1	1	0		9.4%	5.2%	1.8%	2.2%	0.0%	
1918	16	6	1	0	2		10.1%	7.3%	1.9%	0.0%	5.9%	
1919	14	6	0	0	3		10.0%	6.9%	0.0%	0.0%	5.5%	
1920	14	5	8	0	0		9.3%	5.3%	34.8%	0.0%	0.0%	
1921	12	12	4	1	1		8.9%	15.6%	5.1%	1.5%	1.1%	
1923	28	7	9	2	31		26.9%	7.6%	9.0%	1.9%	27.4%	
1924	25	18	5	2	38		22.7%	18.8%	4.4%	2.0%	28.4%	
1925	22	35	3	10	16	20	17.5%	32.4%	2.5%	10.1%	10.2%	31.7%
1926	12	18	2	19	18	22	8.5%	16.5%	1.2%	16.4%	11.0%	28.2%
1927	50	24	4	2	13	11	35.2%	22.0%	2.1%	1.9%	6.4%	13.4%
1928	48	17	1	17	21	7	28.6%	10.1%	0.6%	15.6%	10.0%	6.4%
1929	40	18	16	3	16	14	29.0%	10.8%	8.7%	2.3%	7.0%	15.9%
1930	52	32	16	0	14	13	29.9%	21.5%	9.1%	0.0%	7.8%	13.7%
1931	32	20	2	17	19	10	22.4%	12.0%	1.8%	10.5%	8.0%	10.6%
1932	40	21	13	1	12	9	18.8%	10.7%	7.0%	1.0%	5.6%	10.3%
1933	46	22	21	11	15	1	23.8%	11.1%	12.4%	14.3%	7.1%	1.4%
1934	50	24	11	1	15	4	24.6%	11.0%	10.6%	1.7%	7.0%	7.5%
1935	28	17	10	9	1	5	13.7%	8.3%	10.8%	20.0%	0.5%	8.6%
1936	28	1	6	16	1	7	13.5%	2.9%	15.8%	17.2%	0.5%	9.0%
1937	39	6	13	3	0	5	18.6%	2.7%	18.6%	7.5%	0.0%	7.2%
1938	34	13	20	0	1	4	17.3%	6.3%	28.6%	0.0%	0.4%	5.1%

※1919年以前については「高等学校ニ入学ノ者」。

※私立については明治・大正期設置校のみを記載した。また、『全国中学校ニ関スル諸調査』第6巻は1919(大正8)年～1921(大正10)年、同第7巻は1923(大正12)年および1924(大正13)年のデータであり、1922(大正11)年については収録されていない。【表4】についても同様。

(各年度の『中学校ニ関スル諸調査』を基に作成。)

ては一九三〇年以前には記載がみられないが、それまでにも一定数の宣布者や僧侶がいたと考えられる（後述）。

## 2. 東海中学校卒業者の進学先

### (1) 愛知県内の進学状況

愛知県内に設置された各中学校の進学動向について、『全国中学校二関スル諸調査』から簡単におさえておく。【表3】【表4】は、愛知県内の私立中学校を中心に、卒業者に占める上級学校進学者の比率を年次別にみたものである。比較のため県立については第一中学校、明倫中学校のみを示した。【表3】が高等学校・大学予科への進学者、【表4】が官私立専門学校等への進学者の比率である。高等学校・大学予科への進学については、やはり県立第一中学校において高く、最も高い一九二七年で三五・二%であった。旧藩主徳川家により設立され、その後一九一九年に県立移管した明倫中学校においても高い値をとっており、一九二五年に三三・四%に達している。一方、私立の東海中学校をみると、一九二〇年代前半で三割近くに達しており、一九二三年、一九二四年、一九二六年においては第一中学校をこえている。しかし、県立第一においてはコンスタントに高い値をとっており、一方で私立中学校は年度による高下が激しい。<sup>(14)</sup> 専門学校等への進学者をみると、逆に私立中学校で高い年が多いことが分かる。

【表2】道府県別にみた「宗教宣布者トナリタル者」「僧侶トナリタル者」の数

府県名	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942
岩手	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
秋田	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山形	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
福島	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
茨城	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
千葉	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	2	0	0
神奈川	22	9	3	0	8	8	2	0	0	0	0	0	0
新潟	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福井	17	22	22	27	23	13	6	6	6	9	0	4	3
静岡	0	0	0	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0
愛知	32	25	0	22	16	11	22	9	12	12	6	0	0
三重	0	0	3	4	1	0	4	0	0	0	0	0	0
滋賀	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
京都	77	54	59	40	41	32	29	17	7	15	0	0	0
大阪	0	0	5	2	0	0	1	0	4	0	0	0	0
奈良	34	62	39	51	32	43	0	0	49	40	98	24	0
鳥取	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
島根	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岡山	0	0	0	0	2	6	0	1	0	0	0	0	0
広島	0	0	2	3	2	5	5	3	3	0	0	0	0
山口	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
徳島	0	1	0	2	3	0	0	1	0	0	0	0	1
愛媛	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0
長崎	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0
大分	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0
計	182	178	139	159	132	120	78	43	82	77	106	29	4

(各年度の『文部省年報』を基に作成。)

【表1】府県別にみた進学比率と順位

府県名	1900		1905		1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940	
	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位	比率	順位
北海道	52.2%	18	21.7%	45	19.0%	37	33.2%	13	37.1%	23	35.8%	29	26.5%	25	23.7%	25	49.1%	2
青森	37.0%	33	20.5%	46	17.4%	40	19.1%	43	21.4%	45	29.9%	41	26.2%	27	18.9%	40	40.7%	17
岩手	65.7%	4	41.9%	19	20.8%	34	35.2%	8	39.2%	14	26.9%	43	21.4%	40	23.3%	26	33.3%	36
宮城	58.1%	14	38.2%	27	23.9%	27	26.4%	32	36.0%	28	54.8%	1	36.3%	6	32.1%	5	42.3%	13
秋田	35.3%	37	41.8%	20	29.6%	15	33.2%	14	47.0%	5	30.0%	38	28.8%	20	27.2%	17	43.1%	12
山形	45.1%	27	35.0%	34	38.2%	5	36.5%	7	41.8%	10	36.5%	27	26.7%	24	25.6%	21	40.8%	16
福島	26.3%	43	34.7%	36	13.1%	46	18.2%	44	28.2%	40	28.2%	42	20.1%	42	27.2%	37	28.4%	42
茨城	59.7%	10	52.2%	6	27.4%	20	27.5%	30	34.1%	29	32.5%	34	18.9%	45	21.8%	32	36.3%	28
栃木	25.4%	45	24.0%	44	13.8%	43	19.2%	42	25.1%	43	19.0%	46	18.7%	46	16.7%	44	34.8%	32
群馬	26.1%	44	15.4%	47	12.6%	47	30.8%	24	37.2%	20	37.6%	25	29.6%	15	18.3%	42	37.8%	22
埼玉	51.1%	21	42.6%	17	26.2%	22	37.5%	4	25.5%	42	43.9%	15	25.2%	32	21.2%	34	30.1%	40
千葉	36.4%	34	38.0%	28	22.7%	30	25.1%	34	23.2%	44	22.5%	44	19.6%	43	13.6%	47	22.0%	47
東京	<b>60.6%</b>	<b>7</b>	<b>48.7%</b>	<b>12</b>	<b>39.0%</b>	<b>1</b>	<b>47.0%</b>	<b>1</b>	<b>54.7%</b>	<b>1</b>	<b>53.7%</b>	<b>2</b>	<b>48.2%</b>	<b>1</b>	<b>50.0%</b>	<b>1</b>	<b>53.2%</b>	<b>1</b>
神奈川			36.0%	30	35.7%	10	33.9%	10	46.5%	6	42.3%	18	40.3%	2	31.2%	6	45.0%	6
新潟	59.6%	11	57.2%	3	21.4%	33	26.4%	31	36.2%	27	29.9%	39	24.5%	33	18.4%	41	35.3%	30
富山	67.3%	2	43.6%	16	23.0%	28	32.2%	17	29.3%	39	50.2%	4	28.7%	21	27.4%	16	43.4%	10
石川	63.9%	5	48.9%	11	17.7%	39	25.4%	33	36.5%	26	45.8%	13	28.9%	19	22.6%	29	41.4%	15
福井	60.5%	8	34.9%	35	38.6%	3	33.6%	12	34.1%	30	33.2%	33	21.0%	41	21.1%	35	44.3%	7
山梨	66.7%	3	56.6%	4	25.2%	25	31.4%	23	20.5%	46	21.2%	45	34.6%	8	34.8%	4	34.5%	33
長野	35.0%	38	41.7%	21	22.7%	29	34.3%	9	34.0%	31	35.3%	31	22.5%	39	19.2%	38	36.6%	26
岐阜	41.1%	30	39.2%	25	19.2%	36	21.0%	39	44.1%	7	48.2%	7	30.9%	14	25.6%	23	37.5%	24
静岡	32.7%	39	38.2%	26	22.6%	31	16.8%	45	41.3%	11	47.0%	10	25.8%	28	29.5%	8	39.0%	20
愛知	<b>36.1%</b>	<b>36</b>	<b>35.0%</b>	<b>33</b>	<b>29.1%</b>	<b>17</b>	<b>31.7%</b>	<b>21</b>	<b>37.2%</b>	<b>21</b>	<b>49.0%</b>	<b>6</b>	<b>36.7%</b>	<b>5</b>	<b>28.4%</b>	<b>13</b>	<b>43.5%</b>	<b>9</b>
三重	61.9%	6	44.7%	15	36.0%	9	31.6%	22	38.8%	15	45.3%	14	34.1%	9	28.5%	12	43.1%	11
滋賀	37.9%	32	41.6%	22	20.8%	35	28.6%	28	37.6%	18	47.6%	9	22.8%	37	35.9%	3	35.9%	29
京都	<b>59.8%</b>	<b>9</b>	<b>59.5%</b>	<b>2</b>	<b>37.1%</b>	<b>8</b>	<b>40.5%</b>	<b>3</b>	<b>48.0%</b>	<b>3</b>	<b>51.2%</b>	<b>3</b>	<b>40.2%</b>	<b>3</b>	<b>28.6%</b>	<b>11</b>	<b>45.4%</b>	<b>5</b>
大阪	<b>47.4%</b>	<b>24</b>	<b>52.8%</b>	<b>5</b>	<b>30.6%</b>	<b>14</b>	<b>37.3%</b>	<b>5</b>	<b>39.3%</b>	<b>13</b>	<b>49.1%</b>	<b>5</b>	<b>37.4%</b>	<b>4</b>	<b>37.7%</b>	<b>2</b>	<b>48.8%</b>	<b>3</b>
兵庫	45.3%	26	41.2%	23	37.8%	7	41.9%	2	47.2%	4	46.3%	11	35.7%	7	28.0%	15	44.2%	8
奈良	43.6%	28	49.6%	10	13.1%	45	21.7%	37	33.1%	34	29.9%	40	29.1%	17	23.1%	28	24.7%	45
和歌山	57.9%	15	35.2%	32	22.1%	32	32.1%	18	38.4%	16	40.4%	21	25.7%	30	21.9%	31	29.3%	41
鳥取	36.2%	35	27.4%	41	13.3%	44	16.4%	46	29.5%	37	38.6%	23	29.0%	18	19.2%	39	30.9%	39
島根	52.8%	16	31.9%	40	24.6%	26	32.1%	19	37.0%	24	41.6%	19	29.2%	16	17.4%	43	25.9%	44
岡山	58.8%	13	35.6%	31	35.3%	11	33.7%	11	33.7%	33	37.6%	26	28.5%	22	22.3%	30	32.6%	37
広島	52.0%	19	50.0%	8	37.8%	6	29.5%	27	36.7%	25	42.5%	17	32.9%	12	28.7%	10	40.4%	18
山口	<b>49.6%</b>	<b>22</b>	<b>42.4%</b>	<b>18</b>	<b>38.3%</b>	<b>4</b>	<b>33.0%</b>	<b>16</b>	<b>43.3%</b>	<b>8</b>	<b>47.9%</b>	<b>8</b>	<b>34.0%</b>	<b>10</b>	<b>30.9%</b>	<b>7</b>	<b>37.5%</b>	<b>23</b>
徳島	39.1%	31	34.6%	37	29.3%	16	21.8%	36	32.5%	35	40.8%	20	23.0%	36	21.3%	33	39.1%	19
香川	49.5%	23	36.3%	29	17.8%	38	30.1%	26	29.5%	38	43.5%	16	26.8%	23	26.6%	18	34.8%	31
愛媛	22.5%	46	47.3%	13	34.9%	12	24.9%	35	39.3%	12	39.0%	22	24.0%	34	25.6%	22	36.5%	27
高知	27.7%	41	26.3%	43	25.7%	24	19.9%	41	37.1%	22	46.1%	12	25.8%	29	24.3%	24	33.7%	35
福岡	59.5%	12	49.8%	9	28.1%	19	36.6%	6	30.4%	36	36.3%	28	31.1%	13	26.2%	19	41.9%	14
佐賀	32.1%	40	51.5%	7	27.3%	21	30.2%	25	42.6%	9	35.6%	30	23.9%	35	26.1%	20	38.8%	21
長崎	41.1%	29	33.8%	39	28.6%	18	32.0%	20	37.6%	19	33.6%	32	33.4%	11	29.5%	9	37.1%	25
熊本	46.1%	25	34.4%	38	38.8%	2	33.0%	15	52.3%	2	37.6%	24	25.6%	31	28.0%	14	45.9%	4
大分	52.7%	17	45.1%	14	31.4%	13	20.6%	40	38.3%	17	31.8%	36	26.2%	26	20.3%	36	34.0%	34
宮崎	51.7%	20	65.1%	1	16.2%	42	21.6%	38	26.9%	41	31.3%	37	19.1%	44	13.8%	46	27.8%	43
鹿児島	81.6%	1	40.6%	24	25.9%	23	27.6%	29	33.8%	32	32.3%	35	22.6%	38	23.1%	27	31.6%	38
沖縄	26.9%	42	26.8%	42	16.4%	41	11.4%	47	17.4%	47	10.2%	47	8.5%	47	15.5%	45	23.5%	46

※1900年の神奈川県については『文部省年報』中に記載がない。

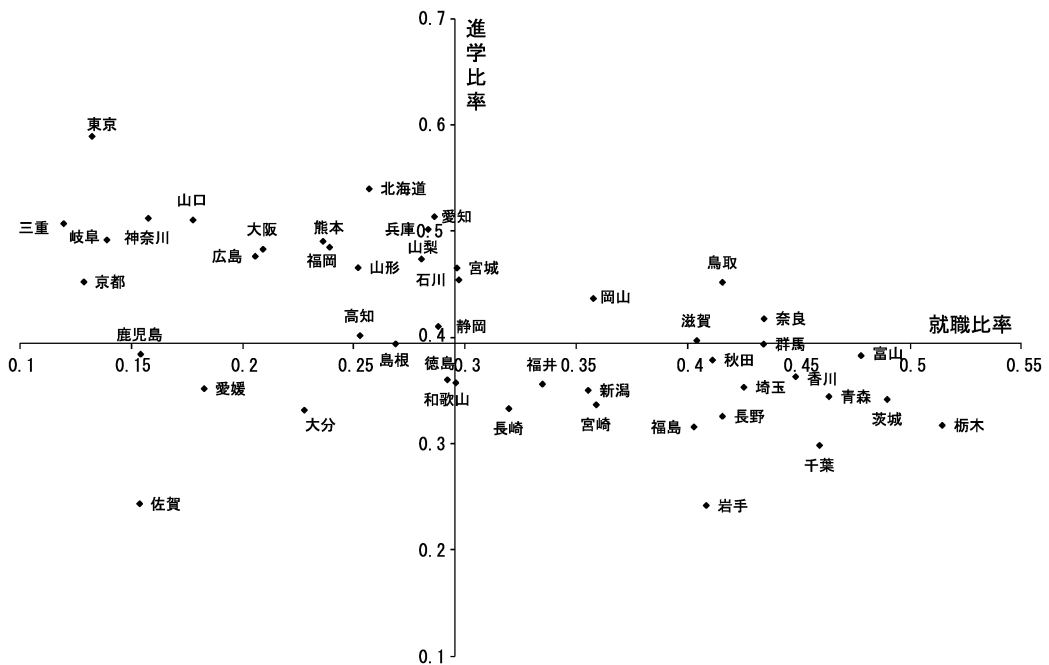
(各年度の『文部省年報』を基に作成。)

五年以降は進学比率が再び上昇に転じている。

府県別の検討を行う。「就職か進学か」という観点で各府県の状況を把握してみたい。【図2】は、一九三二年を対象に、進学比率と就職比率との関連を示した散布図である。交点はそれぞれの中央値である。試みに、進学比率、就職比率のそれぞれの中央値で高低を区切り、四つの分類をしてみた。これを見ると、東京、大阪、京都、愛知などは進学志向が強い「進学型」の府県と考えられる。一方、「就職型」としては栃木、茨城、青森、千葉などがあげられる。

進学比率が高い理由として、高等教育機関の設置が一因として挙げられよう。東京府には東京帝国大学、第一高等学校、東京高等工業学校などのほか多数の私立大学が、京都府にも帝国大学、第三高等学校、京都高等工芸学校など、大阪府には大阪高等工業学校、大阪高等学校など、複数の高等教育機関が設置されていた。順位にしてみると上位を保っていることが分かる（【表1】参照）。愛知県においても第八高等学校、名古屋高等商業学校、名古屋高等工業学校、名古屋医科大学などの高等教育機関が設置され、一九三〇年には進学比率三六・七%、全国五位となっていたことが分かる。また、山口県においては、山口高等学校、その後の山口高等商業学校が設置されていたこともあり、進学比率が高い値となっている。<sup>(1)</sup>

なお、愛知県において特徴的なのは、京都府や奈良県についても言えることだが、中学校卒業後に僧侶となった者の数の多さである（【表2】参照）<sup>(2)</sup>。「宗教宣布者トナリタル者」、「僧侶トナリタル者」につい

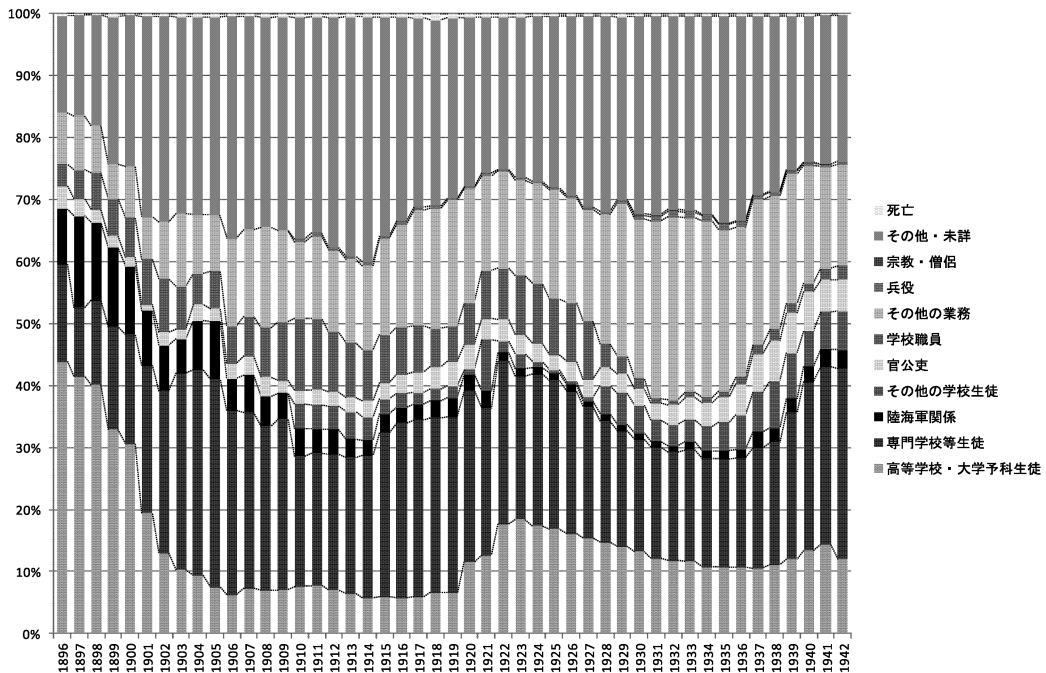


侶／その他・未詳／死亡

(2) 進学動向の分析

全国的な卒業後進路を確認する。【図1】は、さきほどの分類に基づいて、『文部省年報』の「前年度本科卒業生ノ本年度末ノ状況」から作成した、卒業後進路の年次別推移である。<sup>9)</sup>一八九六年から一九四二年にいたる、四七年間の推移である。以下、卒業者に占める「高等学校・大学予科生徒」「専門学校生徒」の比率を「進学比率」、同じく「官吏」「学校職員」「その他の業務」の比率を「就職比率」として考える。

一八九〇年代から一九二〇年代まで、進学比率は下降した。高等学校・大学予科への進学者の比率が大幅に下降しており、専門学校等への進学者の比率は上昇していることが分かる。一八九〇年代においては、中学校卒業生自体が少なく、相対的な高等学校・大学予科進学者数が多かったとみることができよう。それ以降一九二〇年頃まで、進学比率はおよそ三割から四割で推移した。一九一九年の大学令以降数年間についてみると、高等教育機関の増加とともに、高等学校・大学予科の比率の上昇がみられる。一九一〇年から一九三五年の期間で見ると、一九二二年が進学比率のピークとなっており、その後は下降した。「高等教育の爆発時代」<sup>10)</sup>とはいうものの、昭和の不況期を含んでおり、進学比率の低下にわたって「その他の業務」の比率が大幅に上昇していることが分かる。一九三三年には五割近くに達した。一九三



【図1】 中学校卒業者の進路

(各年度の『文部省年報』を基に作成)

沢第一中学校「卒業生調査簿」や同「卒業生方向調査」、『富山県立富山中学校同窓会名簿』などを用い、進学率を算出している。

卒業後の進路については、日本教育史のみならず、教育社会学の分野においても検討されている。天野郁夫は、明治二〇～三〇年代における、福島県立安積中学校の例を挙げて、中学校卒業者の進路について言及している<sup>(4)</sup>。また、広田照幸・鈴木智道・高瀬雅弘「旧制中学校卒業生の進路規定要因に関する研究」においては、山形県鶴岡中学校を事例として、居住地域や親の職業等が進路に影響を及ぼしていることを指摘している<sup>(5)</sup>。

これらの分析は県立が中心となっており、私立中学校についての分析は少ない。斉藤論文には私立埼玉中学校の進学率や就職先が記されているが、私立中学校については論考の余地が残されていると考える。そこで本稿では、東海中学校を一つの事例として示したい。東海中学校は、浄土宗の僧侶養成学校、浄土宗第四教校を前身にもつ学校であった。明治四二（一九〇九）年九月、中学校として設置認可され、中学校令に基づく学校となり公教育に組み込まれていった。

まず、全国的な動向と比較するため文部省官房文書課『文部省年報』や文部省普通学務局『全国中学校二関スル諸調査』を利用し、一九〇〇年代前半から一九四〇年前後の、全国の進路動向を把握する。つきに東海中学校同窓会『昭和十五年十一月現在 会員名簿』（以下、『名簿』と略記する）を用い進学動向を把握する<sup>(6)</sup>。卒業生名簿は、先行研究にも指摘されており、実態把握を行うには限界があるという

性格をもつ<sup>(7)</sup>が、長期的な把握を行うためには有効である。さらに、東海中学校校友会の『会報』から、進学先で開催された「東中会」について検討する。

## 1. 全国的な進学動向

### (1) 分析対象について

東海中学校卒業後の進学先を検討するにあたり、比較のため全国的な動向についてとらえる。明治四〇（一九〇七）年から昭和一七（一九四二）年の『文部省年報』を用いるが、年度により、表記に大きな違いがみられる。特に昭和三（一九二八）年以降、多岐にわたっており、例えば大学予科生徒、高等学校高等科生徒、大学附属専門部又は実科生徒、専門学校生徒、実業専門学校生徒がそれぞれ、官・公・私立の三つに分類されている。また、「勉学中ノ者」、「学校又ハ家庭ニ於テ受験準備中ノ者」、「家庭ニアル者」、「未就職ノ為家庭ニアル者」など、家庭にある者も、その目的が何であるのか、細かく分類されるようになった。これを以下のように分類した。上級学校への進学を高等学校・大学予科と、専門学校等の二つに分けた。次に、陸海軍関係として、士官候補生や主計候補生、海軍諸学校生徒をこれに分類した<sup>(8)</sup>。家庭にある者はその目的にかかわらず「その他・未詳」に分類した。

高等学校・大学予科生徒／専門学校等生徒／陸海軍関係／その他の  
 学校生徒／官公吏／学校職員／その他の業務／兵役／宗教・僧



## 旧制東海中学校における 卒業後の進学動向について

鳥田直哉

キーワード：東海中学校、卒業後、高等教育

### 要約

本稿の目的は、僧侶養成学校から中学校へ転換した東海中学校を例に、卒業後の進学動向を捉えることである。私立中学校の普及・拡大には様々な要因が絡んでおり、府県立中学校の設置状況に比べ府県間の格差が大きい。要因分析のためには個別事例研究の必要性がより高いと考える。

愛知県では比較的多くの私立中学校が設置された。特徴的な点は、複数の僧侶養成学校が私立中学校へ転換したという事実である。中学校の設置経緯等についてはすでに検討した。中学校転換後、いかなる社会的機能を有したのか、その一つとして東海中学校の進学動向について着目する。

まず、全国的な動向と比較するため文部省官房文書課『文部省年報』や文部省普通学務局『全国中学校二関スル諸調査』を利用し、一九〇〇年代前半から一九四〇年前後の、全国の進路動向を把握した。つき

に、東海中学校同窓会『昭和十五年十一月現在 会員名簿』を用い進学動向を把握した。また同校校友会の『会報』から、進学先での「東中会」の様子について検討した。

### はじめに

本稿の目的は、僧侶養成学校から中学校へ転換した東海中学校を例に、卒業後の進学動向を捉えることである。私立中学校の普及・拡大には様々な要因が絡んでおり、府県立中学校の設置状況に比べ府県間の格差が大きい。要因分析のためには個別事例研究の必要性がより高いと考える。

愛知県では比較的多くの私立中学校が設置された。特徴的な点は、複数の僧侶養成学校が私立中学校へ転換したという事実である。中学校の設置経緯等についてはすでに検討した。<sup>(1)</sup> 中学校転換後、いかなる社会的機能を有したのか、その一つとして東海中学校の進学動向に着目する。

旧制中学校卒業生の進学について分析した研究は盛んに行われている。まず、その研究動向について押さえておきたい。斉藤利彦は、明治後期を対象に、中学校卒業生の進路について分析をおこなった。<sup>(2)</sup>

「わが国における学歴主義成立の具体的な態様を、中学校卒業生の進路選択とその意識という視角から」<sup>(3)</sup> 検討したものである。この研究では、『文部省年報』、『全国中学校二関スル諸調査』を用い、全国的な進学動向を把握している。また、個別の中学校については石川県立金